

# 学校予防教育「トップ・セルフ」の効果評価方法

—本当の自己肯定感ならびに学校と職場適応の観点から—

Methods to evaluate the effectiveness of the school-based prevention program “TOP SELF”:  
In terms of authentic (autonomous) self-esteem and children’s and teachers’ adaptation to schools

山崎 勝之, 内田香奈子

YAMASAKI Katsuyuki and UCHIDA Kanako

鳴門教育大学学校教育研究紀要

第 37 号

Bulletin of Center for Collaboration in Community

Naruto University of Education

No.37, Feb, 2023

## 学校予防教育「トップ・セルフ」の効果評価方法 —本当の自己肯定感ならびに学校と職場適応の観点から—

**Methods to evaluate the effectiveness of the school-based prevention program “TOP SELF”:**  
In terms of authentic (autonomous) self-esteem and children’s and teachers’ adaptation to schools

山崎 勝之, 内田香奈子

〒772-8502 鳴門市鳴門町高島字中島 748 番地 鳴門教育大学大学院 心理・教育科学領域  
YAMASAKI Katsuyuki and UCHIDA Kanako  
Field of Psychology and Educational Science, Naruto University of Education  
748 Nakajima, Takashima, Naruto-cho, Naruto-shi, 772-8502, Japan

**抄録:** 本論文は、学校予防教育「トップ・セルフ」の効果の評価する方法について紹介することを目的とした。まず、トップ・セルフの背景理論と方法が、教育目標の構造とともに示された。トップ・セルフの大目標は、自律性、すなわち本当の(自律的)セルフ・エスティーム(自己肯定感)で、それは、自己信頼心、他者信頼心、そして内発的動機づけの高さで規定される。効果の評価においては、この自律的セルフ・エスティームにおける変化を測定することが最も重要になる。またトップ・セルフは、自律的セルフ・エスティームの高まりを通して学校への適応を高める。さらにトップ・セルフは、実施者としての教員の自律的セルフ・エスティームと職場への適応を高めることができる可能性がある。その後、個別の項目に焦点を当てながら具体的な自己報告式の評価方法が小学校1年生から中学生、そして教員を対象に説明された。児童生徒用の質問紙は、小学校低学年(1~3年)、小学校高学年(4~6年)、中学生用に分けられた。児童生徒用の質問紙は紙と鉛筆で実施され、教員用はオンラインで実施される。最後に、今後これらの評価が学校でどのように適用されて行くのかについて、評価方法の課題とトップ・セルフの普及の必要性とともに示された。

**キーワード:** トップ・セルフ, 評価, 本当の(自律的)セルフ・エスティーム(自己肯定感), 学校への適応, 小中学校, 教員

**Abstract:** This article aimed to introduce the methods to evaluate the effectiveness of the school-based prevention program “TOP SELF” (Trial Of Prevention School Education for Life and Friendship). First, the background theories and methods of TOP SELF were depicted, along with the structure of the educational purposes. The ultimate purpose of TOP SELF is autonomy, i.e., authentic (autonomous) self-esteem consisting of self-confidence, confidence in others, and intrinsic motivation. In evaluating the effectiveness, it becomes the most important to assess the changes in autonomous self-esteem. TOP SELF can also enhance the adaption to schools through the enhancement of autonomous self-esteem. Moreover, it is possible that the programs could enhance autonomous self-esteem and adaptation to works for teachers as practitioners. Thereafter, the concrete self-report methods were explained focusing the question items for students from the first grade of elementary schools to junior-high schools and teachers. The questionnaires for students were divided into the lower-grade (1st to 3rd grades), higher-grade (4th to 6th grades) elementary-school, and junior-high-school versions. These questionnaires for students are implemented using papers and pencils, while the teachers’ version is provided and answered online. Lastly, it was shown how to apply these evaluations at schools hereafter, along with limitations of the evaluation methods at present and the necessity to disseminate TOP SELF.

**Keywords:** TOP SELF, evaluation, autonomous self-esteem, adaptation to schools, elementary and junior-high schools, teachers

### I. 学校予防教育「トップ・セルフ」とは

#### 1. 学校予防教育「トップ・セルフ」の誕生

鳴門教育大学予防教育科学センターでは、子どもたち

の健康と適応、それに学業面まで、問題を事前に予防するために学校で行うユニバーサル予防教育を開発し実施してきた。その教育は多くのプログラムからなり、総称して、いのちと友情の学校予防教育「トップ・セルフ」

(TOP SELF: Trial Of Prevention School Education for Life and Friendship: e.g., Uchida, Yamasaki, & Sasaki, 2014; 山崎, 2015; Yamasaki, Murakami, Yokoshima, & Uchida, 2017; Yamasaki, Umakoshi, & Uchida, 2015) と呼ばれている。

トップ・セルフは、この種の予防教育が全国の学校のいずれの学年でも恒常的に実施されることを目指して開発された。これまでこの種の教育は心理学を中心に多くのプログラムが開発されて来たが、多くの学年で安定して恒常的に実施されているプログラムは皆無と言ってよく、このことを達成することは難問となっていた(山崎, 2022 参照)。

トップ・セルフは、この難問を解決しようとして開発された以上、これまでのプログラムにはない特徴を持ち、その詳細は上記の諸々の論文や書籍に譲るが、以下に簡潔にその特徴を示しておく。

## 2. トップ・セルフの背景理論と方法の特徴

トップ・セルフは、非意識にある身体的反応としての情動を喚起し、情動と感情(情動が意識に上り、特定の感情名で呼べるようになったもの)が十分に生起している状態で、学習目標、つまり、望ましい認知、思考、行動などの心的特徴を習得し、記憶化することを目指す。情動や感情が十分に喚起されている状態は、児童・生徒が授業に没頭している状態でもある。そこでトップ・セルフでは、子どもたちが授業にのめり込むような方法が随所にとられる。冒険型のアニメ・ストーリーの中、主人公たちと旅するように授業を進め、クラス全体が渦のように一体化する集団ゲームを使用し、音楽や音響もふんだんに取り入れる。これらの方法は、基本的にパワーポイントのスライドに先導されて実施することになる。

授業には基本的な型があり、授業目的の提示、導入アニメ・ストーリー、活動助走、活動クライマックス、シェアリング、終結アニメ・ストーリー、授業で学んだことの提示、というプロセスで進んで行く。

この予防教育は日々改訂が行われ、現在第3世代と呼ばれるバージョンに発展している。第3世代では、実施者としての教員の負担を最大限に軽減するために様々な工夫がなされ、授業者は授業前に全体を少しチェックするだけで授業が実施でき、授業進行を覚えたり、発話を覚えたりすることは極力ないように改善されている。

## 3. トップ・セルフの大目標と構成

トップ・セルフは、子どもたちが将来的に健康や適応上の問題をもたらさないようにする力としての心的特性を形成することを目指す。その大目標の中心は自律性(autonomy)である。自律性は、他者信頼心、自己信頼心、内発的動機づけから構成され、その高さはこれらの3要素がいずれも高まっていることで規定される(山崎,

2013)。これに、対人関係性(interpersonal relatedness)も大目標に付与されているが、中心は自律性になる。この大目標を達成するために、4つの教育の柱を設定し、自己信頼心(自信)、感情の理解と対処、向社会性、ソーシャル・スキルの各育成教育になる。これらの4つの教育はルートは異なるが、いずれも自律性の育成に寄与することになる。

## 4. 実施者としての教員への影響

トップ・セルフは、子どもたちの参加意欲をかき立て、積極的に参加を促す教育特徴がある。この参加への動機づけの高まりは、予防教育に限らずいずれの授業でも重要になり、参加への動機づけが高まることなく授業の成功はあり得ない。このことから、トップ・セルフの授業者はおのずと子どもの参加動機づけを高める授業スキルを身につけることになり、これが他の授業での授業スキルの向上にもつながる。加えて、トップ・セルフの授業を自分が教えていて、子どもたちが喜々として授業に参加する姿から授業を行う喜びを教員自身が取り戻すことも多い。この授業をする喜びこそが、教員が教員たる職業に価値を見いだすところであり、教師自身がトップ・セルフにより好影響を受けることになる。

上記のことから、教職という職業への享受感が高まり、授業力、生徒指導力、教員同士への交流力等多面にわたり良好な結果を得ることになる。日本の学校教員の劣悪な労働環境や条件は世界の中でも際だっており(国立教育政策研究所, 2019)、教員が疲弊し、教職への魅力を感じず、離職できない場合は、精神疾患等で休職を余儀なくされるか、気力が減退したまま半ば惰性で子どもたちの教育にあたり続けるかになることが多い。

## II. 大目標としての自律性ならびに「本当の『自己肯定感』の育成」プログラム

### 1. 自律的セルフ・エスティームと自律性

前節で、大目標としての自律性について紹介した。この自律性はセルフ・エスティーム(Self-Esteem: SE)と密接に関係する。SEは、一般には自尊感情や自己肯定感と呼ばれている。ここでSEと自律性の関係を述べる前に、SE自体について説明する必要がある。

心理学におけるSEの研究は古く、現在に至るまで数多くの研究が行われている。しかし、近年になり、本来健康や適応に寄与すると考えられて来たSEの効用は疑問視され始め(Baumeister, Campbell, Krueger, & Vohs, 2003; Emler, 2001)、それに伴いSEの概念そのものの見直しが主張されるようになった(Deci & Ryan, 1995; Kernis, 2003)。その中で、Yamasaki, Uchida, Yokoshima, & Kaya (2017)は、SEを自律的SE(autonomous self-

esteem) と他律的 SE (heteronomous self-esteem) に 2 分し、前者は健康や適応に寄与するが、後者は反対に阻害する SE であるとした。そして、自律的 SE は測定時には何らかの方法で非意識的に測定する必要があり、安易に自己報告式の質問紙では測定できないことを示唆した。

この自律的 SE は大目標の自律性に相当し、両者は同じ概念であるとされている (山崎, 2017)。また、この自律的 SE は、学校で馴染みのある「自己肯定感」の用語を使用し、本当の自己肯定感とも呼んでいる。本論文では、自律的 SE と本当の自己肯定感の用語が混在するが、同じ意味で使用されている。

## 2. 本当の「自己肯定感」の育成プログラム

トップ・セルフは、4つの教育の柱から成ることを先に示した。それはいずれも、最終的に大目標の自律性の育成につながる。中でも、自己信頼心(自信)の育成プログラムから発展した本当の自己肯定感の育成プログラムは自律性の育成に直接的につながっている。

本当の自己肯定感育成プログラム(以下、自己肯定感プログラム)は、自己信頼心(自信)の育成プログラム(以下、自信プログラム)を土台として開発されたものである。自己肯定感プログラムは、自律性、つまり自律的 SE を育成することを直接的に目指しているので、自律的 SE の発達過程(山崎, 2017)から、言語的インストラクションを用いた意識上の操作は極力排除し、自然な体験の中で学習された心的特徴を非意識の中に埋め込むという教育を強調している(山崎・内田・横嶋・賀屋・道下, 2018)。

4つの教育の柱となるプログラムは、小学校3年生から中学校1年生の各学年に適用できるものが完成されているが、現在のところ、自己肯定感プログラムは、小1, 2, 5, 6年生, 中1版があり、他の学年でも開発が進められている。

## III. 児童・生徒用の効果評価方法

### 1. 本当の自己肯定感と学校享受感の測定

自律的 SE の測定は非意識的な方法を用いて測定することが推奨されている。そのため、現在のところ、集団で実施できる潜在連合テスト(implicit association test)が作成され、小学校1年生から中学生まで広く使える版がある(横嶋, 2022; 横嶋・野口・賀屋・山崎, 2021; 横嶋・大上・賀屋・山崎, 2020; 横嶋・内山・内田・山崎, 2017)。この潜在連合テストは、自律的 SE の特徴につながる用語(すばらしい, まんぞくした等)と関連人物(じぶんは, ともだちは)との潜在的な連合の強さを、基本的に回答速度(一定時間内の正答数)で調べる方法をとる。現時点で、紙筆版(横嶋他, 2017; 横嶋他,

2021) とタブレット PC 版(横嶋, 2022; 横嶋他, 2020) のテストが完成され、それぞれ信頼性と妥当性が確認されている。

このように潜在連合テストは精度が高い測定法であるが、一般の学校側が行うには難点がある。それは、厳密に各段階での実施時間を管理する必要があることがまず指摘される。また、紙筆版では採点に時間がかかり、タブレット PC 版では自動的に採点できるが、用意されたプログラムに適合したタブレット PC が子どもの数だけ必要になる。研究者がタブレット PC を持参し、学校に行って実施するならそれほど問題はないが、多くの学校で教育が普及するためには学校側が独自に実施できるようにする必要もある。また、学校で実施する場合は、児童生徒にとっても、実施する教員にとっても、時間的にも、労力的にも大きな負担を与えない測定法にする必要がある。

そうすると質問紙に戻るが、質問紙は使用できない場合が多い。たとえば、最も頻度高く使用されている質問紙は Rosenberg の質問紙(Rosenberg Self-Esteem Scale)(Rosenberg, 1965)であるが、この質問紙は他律的 SE を測る特徴が強く、望ましい自律的 SE の測定には使用できない(Yamasaki, 2019)。しかし質問紙の使用の可能性がないわけではなく、たとえば、自律的 SE の概念に近いものとして本来感(a sense of authenticity; Kernis, 2003)を測定する質問紙があり(伊藤・小玉, 2005)、比較的望ましい自律的 SE に近い概念を測定できている。つまり、他者との比較なしに自分本来の在り方を測定できるような質問項目を考えることで質問紙の使用を検討する方向がある。ただこの場合、自律的 SE の測定は非意識上の方法がベストであり、意識上の測定法である質問紙法ではその精度が落ちることには留意されたい。

また既存の本来感の尺度(伊藤・小玉, 2005)は成人用であり、中学生への適用例(赤川・下田・石津, 2016)もあるが、その場合の信頼性や妥当性の検証が十分ではない。そこで、児童や生徒用に尺度が必要になり、自律的 SE を忠実に測定するためには、その構成要素である自己信頼心、他者信頼心、内発的動機づけが測定できることを考慮した質問項目にする必要がある。

### 2. 質問紙を構成する項目の内容

こうして、自律的 SE を構成する項目は、自己信頼心、他者信頼心、内発的動機づけから成るものとし、各3項目準備する。項目の作成にあたっては概念に精通する心理学の専門家が複数名であたり、内容的妥当性(content validity)を付与する。また、他律的 SE の要素が混入しないように、他者比較の要素を排除し、本来抽象的な概念である構成要素を可能な限り具体的に問う内容にする。このことは、特に小学校低学年では、理解度の低さ

表1 小学校低学年（1～3年）用質問紙の質問項目と回答選択肢

- 1a. あたらしい ことを するとき は じょうずに できるか しんばいに なりますか。  
(まったく しんばいに ならない あまり しんばいに ならない すこし しんばいに なる とても しんばいに なる)
- 1b. ともだちが だれかの うわさを していると きに なりますか。  
(まったく きに ならない あまり きに ならない すこし きに なる とても きに なる)
- 1c. やって みたい ことは すぐに やると おもいますか。  
(まったく そう おもわない あまり そう おもわない すこし そう おもう とても そう おもう)
- 2a. しらない ひとに あうときは しんばいに なりますか。  
(まったく しんばいに ならない あまり しんばいに ならない すこし しんばいに なる とても しんばいに なる)
- 2b. ともだちと いっしょに いると たのしいですか。  
(まったく たのしく ない あまり たのしく ない すこし たのしい とても たのしい)
- 2c. ともだちと おはなしが したいですか。  
(まったく したくない あまり したくない すこし したい とても したい)
- 3a. べんきょうの ほかに やって みたい ことが ありますか。  
(まったく ない あまり ない すこし ある たくさん ある)
- 3b. すきな ことを やっていると むちゅうに なりますか。  
(まったく ならない あまり ならない ときどき なる いつも なる)
- 3c. やって みたい ことが ありますか。  
(まったく ない あまり ない すこし ある たくさん ある)
- (以上、項目はランダムにならべる) (以下は、このままの順で追加される)
- 4a. がっこうは たのしいですか。  
(まったく たのしく ない あまり たのしく ない すこし たのしい とても たのしい)
- 4b. クラスは たのしいですか。  
(まったく たのしく ない あまり たのしく ない すこし たのしい とても たのしい)
- 4c. がっこうに くるのを たのしみに していますか。  
(まったく たのしみに していない あまり たのしみに していない すこし たのしみに している とても たのしみに している)
- (以下は、授業後にこの順序で加えて実施)
5. ○○\*と いっしょに した べんきょうは たのしかったですか。  
(まったく たのしく なかった あまり たのしく なかった すこし たのしかった とても たのしかった)
6. ○○と いっしょに した べんきょうは よくわかりましたか。  
(まったく わからなかった あまり わからなかった すこし わかった とても よく わかった)
7. また こんな べんきょうを したいですか。  
(まったく したくない あまり したくない すこし したい とても したい)

\*アニメに登場した代表的キャラクターの名前が入る。

から留意する必要がある。

また、児童生徒においては学校生活への享受感を問う質問項目を入れ、さらに授業後には、受けた予防教育授業の理解度と享受感を問う項目を入れる。

### 3. 項目の実際

小学校低学年（1～3年生）版の項目が表1に示されている。1番（a～c）は自己信頼心、2番（a～c）は他者信頼心、3番（a～c）は内発的動機づけにかかわる項目になる。このことは、続く表2と3でも同様である。4番（a～c）は学校やクラスの生活の享受感を尋ねる項目になっている。1～3番までの9項目は無作為順に配置され、その後4番の項目がa, b, cの順で続く。そして授業後は、授業の享受感（5番）、理解度（6番）、再度授業を受けることへの希望をこの順で聞く。選択肢

は4件で、各項目に適した選択肢の言葉を付与している。

小学校低学年（1～3年生）は、質問項目はすべてひらがなで、基本的に文節ごとにスペースが入れられ、読みやすくされている。また、実施教員が音読しながら全体と一緒に同じペースを守って実施する。このため、通常5分以内で終わることができると考えられる質問紙であるが、低学年の場合は15分ほどかかることが予想される。

次に、小学校高学年（4～6年生）版ならびに中学生版が表2に示されている。先述のように1～3番の質問内容は低学年版と同じである。また、4番以下の構成も同じである。ただし、内容は同じでも、表現は発達段階の高まりに合わせて変えている。選択肢は、1（まったくそう思わない）～4（とてもそう思う）の4件法に統一されている。

表2 小学校高学年（4～6年）ならびに中学生用質問紙の質問項目と回答選択肢

- 1a. 新しいことをするとき、うまくできるか心配になる。  
 1b. 友だちが、だれかのうわさ話をしても気にならない。  
 1c. やってみたいことは、すぐにやってみる。  
 2a. 知らない人に会うときは、心配になる。  
 2b. 友だちといっしょにいると楽しい。  
 2c. 友だちとたくさん話したい。  
 3a. 勉強以外にも、いつもやりたいことがある。  
 3b.好きなことをやっていると、時間をわすれる。  
 3c. やってみたいことがたくさんある。

(以上、項目はランダムにならべる)(以下は、このままの順で実施)

- 4a. 学校は楽しい。  
 4b. クラスは楽しい。  
 4c. 学校に来るのが楽しみだ。

(以下は、授業後にこの順序で加えて実施)

5. ○○\*といっしょに受けたじゅ業は楽しかった。  
 (中学生用) ○○たちと進めた授業は楽しかった。  
 6. ○○といっしょに受けたじゅ業はよくわかった。  
 (中学生用) ○○たちと進めた授業はよくわかった。  
 7. またこのような授業を受けたい。

選択肢 1 まったくそう思わない 2 あまりそう思わない 3 すこしそう思う 4 とてもそう思う  
 漢字にはすべてルビをふる。

\*アニメに登場した代表的キャラクターの名前が入る。

また、教示文ならびに各項目の漢字は、小学生版なら、適用する最低学年で習う漢字を使用し、小学生低学年版なら1年生、高学年版なら4年生で習う漢字のみを使用した。中学生版は、成人並みの漢字使用とした。どの版も、使用した漢字にはすべてルビをふっている。

#### IV. 教員用の効果評価方法

##### 1. 本当の自己肯定感、教職に関する自己肯定感、そして、教職享受感の測定

評価においては、予防教育の授業を実施する教員についても評価を行う。これまで授業を行った教員から、他の教科でも授業が上手くなった、授業を実施して教員自身が楽しめたという感想が多数寄せられていたので、実施した教員の変化についても客観的に調べる必要があった。

授業を子どもたちと一体となって実施できたことから自信を得て、授業を実施することの享受感が高まった教員は自律的SEも高まり、それにともない教職活動の各方面、学級経営、生徒指導、授業実施に加えて同僚との協働についての自己効力感が高まることも予想され、この点についても調べることにした。さらには、これらの特性が高まることにより、心理的健康面が向上すること

も予想され、この点をバーンアウト (burnout) 傾向とレジリエンス (resilience) の観点から調べ、ひいては、教職についていることへの満足感も調べる。これらの自己肯定感や教職への満足感は、教育環境の国際比較であるOECD国際教員指導環境調査 (TALIS) 2018 (国立教育政策研究所, 2019) の世界的な調査でも調べられていることであり、可能な限りそこでの結果と比較することも視野に入れたい。

そして、予防教育を受けたクラスや子どもの様子を実施者としての教員に尋ね、予防教育の実施ならびに効果についての主観的な評価を教員自身に問う。

##### 2. 質問紙を構成する項目の内容と実際

上記の各特徴を測定する項目内容については、自律的SEでは、子どもでの測定と同様の観点、つまり、自己信頼心、他者信頼心、内発的動機づけの観点から各3項目で調べる。

その他の項目は、TALIS 2018の調査同様、基本的には各1項目で調べる。測定対象のほとんどが構成概念であるので1項目では不十分であるが、実施負担を考え、およその傾向としてとらえたい。

表3には、教員版の質問項目が示されている。1～3番の質問項目の内容と構成は子ども版と同じであるが、

表3 教員用質問紙の質問項目と回答選択肢

- 
- 1a. 自分のことでは、あまり不安を感じない。  
 1b. 人のうわさ話は、あまり気にならない。  
 1c. やってみたいことがあれば、まよわずやってみる。  
 2a. はじめて会う人でも、あまり不安を感じない。  
 2b. 仲間といっしょにいると楽しい。  
 2c. 仲間と話すのが好きだ。  
 3a. 仕事以外で、いつもやりたいことがある。  
 3b.好きなことをやっていると、時間を忘れる。  
 3c. やってみたいことがたくさんある。
- (以上、項目はランダムにならべる)(以下は、このままの順で実施)
4. 学級担任をやれば、学級をうまく運営できる。  
 5. 問題行動を示さないように、あるいは問題行動を示してもすぐに正すように、子どもを導くことができる。  
 6. 授業は、子どもを引きつけ、分かりやすく実施することができる。  
 7. 他の先生たちといっしょに協調して働くことができる。  
 8. 仕事をする気力がなくなることがある。  
 9. いやなことがあったり、問題に出会っても、すぐに乗り越えることができる。  
 10. もう一度仕事を選べるとしたら、また教員になりたい。  
 11. 今の学校における自分の仕事の成果に満足している。  
 12. 予防教育を実施するクラスの今の状態はどうか。(授業後は、実施した)
- (以下は、授業後にこの順序で加えて実施)
13. 子どもたちは楽しく授業に参加していた。  
 14. 授業内容は子どもたちをよく引きつけていた。  
 15. 学習目標は達成されていた。  
 16. 授業の実施にはそれほど準備は必要なかった。  
 17. 授業の実施は容易だった。  
 18. 授業をしていて教員も楽しめた。
- 

選択肢 1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない  
 4 だいたいあてはまる 5 よくあてはまる (12番の項目の選択肢は本文参照)

成人版としての文章表現がなされている。

4番から11番は、TALIS 2018での評価項目との比較を意識したものである。4番から7番は教員の自己効力感に関する項目で、TALIS 2018同様それぞれ1項目で尋ねている。4番は学級経営、5番は生徒指導、6番は授業実施、7番は職場の同僚との協働への自己効力感である。

8番はバーンアウト傾向、9番はレジリエンスを問うている。10番と11番は教職への満足度をそれぞれ独立して聞いている。12番は、予防教育を実施するクラスの現時点での状態を聞いている。

授業後には、13番で子どもたちの授業への参加度、14番は授業の子どもたちへの誘引度、15番は授業目標の達成度を聞き、16番から18番は教員に予防教育を実施した感想を聞いていて、16番は実施準備の必要度、

17番は実施容易度、18番は実施した教員自身が楽しめたかどうかを問うている。選択肢は、1(まったくあてはまらない)～5(よくあてはまる)までの5件法で、12番だけは、1(たいへん悪い)～5(たいへん良い)の5件法であった。

なお、教員用の評価のみ Google の Forms を使用してネット上で実施される。その Forms 画面の最初のページの一部分が図1に示されている。

## V. 今後の効果評価の実施と課題

### 1. 今後の効果評価の実施

本論文でこれまでに紹介したように、学校予防教育「トップ・セルフ」を実施するにあたって、小学生、中学生、そして予防教育の実施教員への効果評価方法がそ

## アンケート調査のお願い（予防教育実施前）

---

鳴門教育大学から提示されたID番号4桁\*

回答を入力

---

**回答についての説明**  
 予防教育の授業を実施していただく（チーム・ティーチングを含む）先生ご自身についておたずねします（5分ほどで終わります）。

以下の項目を読み、現時点のご自身について、もっとも当てはまるものを1つ選んでください。

ご回答は、鳴門教育大学予防教育科学センターにて個人が特定されないかたちで保管し、外部（学校や教育委員会など）に知られることは一切ありません。

この調査にご協力いただける場合は、以下にお進みください。

---

予防教育を実施するクラスの今の状態はどうか。\*

①たいへん悪い

②少し悪い

③どちらとも言えない

④少し良い

⑤たいへん良い

---

**回答の送信**  
 ご回答を送信していただける場合は、以下の送信ボタンを押してください。

フォームをクリア

図1 教員用質問 Forms 画面（部分）

ろった。今年度予防教育を実施し始めたほとんどの学校では、今のところ、この尺度を実施教員を含めて実施してもらっている（2022年9月現在）。尺度は、教育実施前後に適用し、教育実施による変化を調べるデザインを適用している。

今のところ、関東圏、中京圏、関西圏、中国・四国圏から複数の代表校から評価データがそろそろ予定である。今年度は、教育を実施しない比較対照校の設定はないが、それでも、多くの学校で教育実施前後のデータがそろい、変化の有意性を見ることで学校予防教育の効果がかなりの精度で明らかになろう。

## 2. 今後の課題

### (1) 質問紙の信頼性と妥当性の検証と向上

本論文で紹介した質問紙は、まだ信頼性は確認されていない。複数の質問項目から測定される構成概念（本当の自己肯定感など）は、信頼性と妥当性を確認する必要がある。今年度、内的整合性の観点から信頼性の一部の有無は確認される予定である。

妥当性の確認はむずかしく、既存の尺度でもその多くは妥当性の確認なく適用されているのが現状である。本

論文で紹介した尺度は、測定しようとする概念について複数の専門家が内容的妥当性（content validity）を考慮して作成されているので、この点では妥当性の一部は保証されている。今後は、他の尺度との併存的妥当性など何らかの基準と比較した上で基準関連妥当性を確認しながら、構成概念的妥当性全般の観点から妥当性を検討する必要がある。

### (2) 予防教育を効果評価とともに普及させる必要性

学校予防教育「トップ・セルフ」はこれまで多くの学校で実施されてきた。しかし、効果評価は十分に適用できていない状況があった。実施した学校は、実施した以上子どもたちにどのような効果があったのかを確認したいという希望があるはずである。しかしこれまでは、今回のような簡便な効果評価方法は開発されて来なかった。測定精度を上げるため、本当の自己肯定感などは潜在連合テストなど質問紙以外の方法に頼り測定されていたが、潜在連合テストを学校が単独で実施することには負担があった。

確かに質問紙など意識を介して自分について回答する方法では、本来非意識にあって私たちをコントロールしていると考えられるパーソナリティ、特に本当の自己肯定感については、意識化する過程でその特徴が変貌してしまうことが示唆されていた（Yamasaki et al., 2017）。しかし、質問紙でも他者比較による評価の混入に気をつければ精度が落ちたとしてもある程度は本当の自己肯定感をとらえることができると考え、今回の質問紙が考案されている。

子どもだけではなく、近年の学校における労働環境の悪化などから教員の自己肯定感や心身の健康度が落ちている現況では、その現状そして予防教育による変化の状況がこれらの質問紙により測定が可能となる。こうして、今後、予防教育とその評価方法をセットにして学校側に利用してもらう道が拓け、予防教育のさらなる飛躍が期待されよう。

## 引用文献

- 赤川里奈・下田芳幸・石津憲一郎（2016）. 中学生の友人関係、自尊感情及び学校適応感の相互影響性 富山大学人間発達科学部紀要, 10, 1-10.
- Baumeister, R. F., Campbell, J. D., Krueger, J. I., & Vohs, K. D. (2003). Does high self-esteem cause better performance, interpersonal success, happiness, or healthier lifestyles? *Psychological Science in the Public Interest*, 4, 1-44.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1995). Human autonomy: The basis for true self-esteem. In M. H. Kernis (Ed.), *Efficacy, agency, and self-esteem* (pp.31-49). New York: Plenum Press.



- Emler, N. (2001). *Self-esteem: The costs and causes of low self-worth*. London: Joseph Rowntree Foundation.
- 伊藤正哉・小玉正博 (2005). 自分らしくある感覚 (本来感) と自尊感情が well-being に及ぼす影響 教育心理学研究, 53, 74-85.
- Kernis, M. H. (2003). Toward a conceptualization of optimal self-esteem. *Psychological Inquiry*, 14, 1-26.
- 国立教育政策研究所 (編) (2019). 教育環境の国際比較 OECD 国際教員指導環境調査 (TALIS) 2018 報告書 一学び続ける教員と校長— ぎょうせい
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Uchida, K., Yamasaki, K., & Sasaki, M. (2014). Attractive, regularly-implementable universal prevention education program for health and adjustment in schools: An innovation from Japan. *Procedia - Social and Behavioral Sciences*, 116, 754-764
- 山崎勝之 (2013). トップ・セルフの教育目標 予防教育科学に基づく「新しい学校予防教育」(第2版) (pp.17-47) 鳴門教育大学
- 山崎勝之 (2015). 「学校予防教育」とは何か 鳴門教育大学
- 山崎勝之 (2017). 自尊感情革命 一なぜ, 学校や社会は「自尊感情」がそんなに好きなのか? 福村出版
- Yamasaki, K. (2019). Why do researchers and educators still use the Rosenberg Scale? Alternative new concepts and measurement tools for self-esteem. *Journal of Psychology and Behavioral Science*, 7, 74-83.
- 山崎勝之 (編著) (2022). 日本の心理教育プログラム 一心の健康を守る学校教育の再生と未来— 福村出版
- Yamasaki, K., Murakami, Y., Yokoshima, T., & Uchida, K. (2015). Effectiveness of a school-based universal prevention program for enhancing self-confidence: Considering the extended effects associated with achievement of the main purposes of the program. *International Journal of Applied Psychology*, 5, 152-159.
- Yamasaki, K., Uchida, K., Yokoshima, T., & Kaya, I. (2017). Reconstruction of the conceptualization of self-esteem and methods for measurement: Renovating self-esteem research. *International Journal of Psychology and Behavioral Sciences*, 7, 135-141.
- Yamasaki, K., Umakoshi, A., & Uchida, K. (2017). Efficacy of a school-based universal program for bullying prevention: Considering the extended effects associated with achievement of the direct purposes of the program. *International Journal of Social Science Studies*, 5, 1-8.
- 山崎勝之・内田香奈子・横嶋敬行・賀屋育子・道下直矢 (2018). 「自律的セルフ・エスティーム」を育成するユニバーサル予防教育の教育目標の確立と授業方法の開発方針 鳴門教育大学学校教育研究紀要, 32, 91-100.
- 横嶋敬行 (2022). 自律的ならびに他律的セルフ・エスティームを測定するタブレット PC 版潜在連合テスト 山崎勝之 (編著) (2022). セルフ・エスティームの研究と教育の再構築 一概念と測定法から教育方法と効果評価まで— (pp.103-117) 風間書房
- 横嶋敬行・野口大輔・賀屋育子・山崎勝之 (2021). 絵文字刺激を使った小学校低学年児童用の紙筆版潜在連合テストの予備的研究 一自律的ならびに他律的自尊感情の測定法として— 日本教育心理学会第63回総会抄録集, p.472.
- 横嶋敬行・大上遊路・賀屋育子・山崎勝之 (2020). 児童用のタブレット PC 版セルフ・エスティーム潜在連合テストの開発 感情心理学研究, 27, 61-66.
- 横嶋敬行・内山有美・内田香奈子・山崎勝之 (2017). 児童用の紙筆版自尊感情潜在連合テストの開発 一信頼性ならびに Rosenberg 自尊感情尺度と教師による児童評定を用いた妥当性の検討— 教育実践学論集, 18, 1-13.